

実践事例
1

3学年混合の異学年集団での学びによって、 互いを認め合い、学び合う「多様な学び」のある学校に 広島県 福山市立常石^{つおいし}ともに学園

広島県福山市 プロフィール

◎広島県の東部、岡山県との県境に位置する中核都市。戦後、山陽・山陰と四国を結ぶ産業・文化・交通の要衝として発展し、高度経済成長期には重工業主体の産業都市となる。2011年度、教育学部と都市経営学部を擁する福山市立大学を開学。また、少子化等により、2019～2023年度で、小・中・義務教育学校21校を9校に再編予定。

人口 約46万2,000人 面積 517.72km² 市立学校数 小学校70校、中学校31校、義務教育学校2校、中高一貫校1校 児童生徒数 約3万5,700人 教員数 約2,600人

福山市立常石ともに学園 プロフィール

◎2022年4月開校。校名の「ともに」には、「友」と「共」に育つ、子どもたちと「伴に」学び続けるという意味があり、子ども、教員、学校、地域がともに成長していけるようにという願いを込めた。

校長 甲斐和子先生 児童数 126人 グループ数 7グループ(うち特別支援2) 教員数 16人



校長
甲斐和子
かい・かずこ

2019年度、常石小学校校長に着任。2022年度から現職。



教頭
坂口憲治
さかぐち・けんじ

福山市教育委員会等を経て、2022年度から現職。

「福山100NEN教育」の方向性と重なったイエナプラン教育

「ともに学び ともに生きる」をスローガンに、2022年4月、広島県福山市に開校した同市立常石ともに学園は、公立校として国内初のイエナプラン教育校に認定された小学校だ*3。開校に至った背景には、同市の教育の方向性が、イエナプラン教育の理念と重なる部分が多かったことがある。

2016年、同市は市政施行100周年を受け、次の100年を築く子どもの育成を目指す「福山100NEN教育」を掲げ、21世紀型スキル&倫理観を育む学校教育改革に着手した(図2)。その一環として、2017年度の1年間、小学校2校で1年生の国語と算数の授業をほぼ毎日、映像等で記録して分析。子どもの学びは、教科や学年の枠を超えること、理解する過程や方法、進度は子ども個々に様々であることを改めて確認した。

そうした研究から、子どもが自ら学びを進めていく教育が重要だと考え、2018年度から、小学校7校のバ



イロット校で、教科横断・学年縦断的な教育課程を編成し、異学年集団での学びや、自分で計画を立てて自分のペースで進める学びなどの実践研究を行った。

学校教育改革を進める中、2019年に三好雅章教育長は、「学びの変革」事業を進める広島県の平川理恵教育長とともにオランダでイエナプラン教育の小学校を視察。そこで見た子どもが自ら学びを進める姿が、「福山100NEN教育」で育成を目指す子どもの姿と重なったことから、多様な学びの場の提供形態の1つとして、イエナプラン教育校の設置を決めた。

校舎は、小中一貫教育校への移行により廃校となる同市立常石小学校の施設を利用することとし、2020年度から1～3年生の異学年集団での学びを一部開始。移行期間を経て、2022年度に、常石ともに学園を開校した。

同校は、通学区を特定せず、通学の条件として、子どもが自力で通学、または保護者の責任で送迎ができることとしている。2022年度は、全校児童126人中、旧常石学区外の通学者が64人で、市外からも3人いる。新入生の募集では、30人枠に37人の応募があったため、市内在住者を優先して入学者とし、残りを抽選とした。

図2 福山市の主な教育施策

2015 ▶	2016 ▶	2018 ▶	2019 ▶	2020 ▶	2021 ▶
1・2・3で取り組む「小中一貫教育」全面实施	「福山100NEN教育」スタート	「子ども主体の学び」全教室展開	一人ひとりの個性や考え方を大切に学ぶづくり	「子ども主体の学び」全教室・家庭展開	リアル＆デジタル「学びが面白い!」の深化
1 自ら考え学ぶ授業	日々の授業を中心とした全教育活動で21世紀型「スキル&倫理観」を育み、様々な場面で行動化できる学びをつくる	～学びが面白い!～	イエナプラン教育導入の研究	イエナプラン教育校設置準備	認知の仕組みから学習方法を見直す
2 大好き福山! ぶるさと学習					
3 地域一丸					

※福山市教育委員会の提供資料を基に編集部で作成。

*3 「20の原則とコア・クオリティの学校要覧への明記、教育計画への反映」「イエナプランに関する研修の修了生が3人以上」など、日本イエナプラン教育協会が定めた7つの要件を満たすと、イエナプラン教育校に認定される。2022年4月現在、国内では、私立の大日向小学校(長野県佐久穂町)と同校の2校のみ。

3学年混合の活動を通じて、 認め合い、学び合いが日常的に

同校は、目指す子どもの姿に「自立・共生・自己実現」を掲げ、「福山100NEN教育」とイエナプラン教育を融合した同校ならではの教育活動で、子ども一人ひとりの可能性を最大限に伸ばすことを目指している。

◎異学年集団での学び

活動の基本単位は、異学年でのグループ編制だ。今年度は1グループを25人前後とし、1～3年生混合で3グループ、4～6年生混合で2グループを編制。開校にあたっては、各グループに教員を2人ずつ配置した。甲斐和子校長は、異学年集団で学ぶ意義を次のように語る。

「子どもたちは、一緒に活動していくうちに、年齢に関係なく互いの個性や発達、経験などの違いをあたり前のように受け入れられるようになります。年長者と年少者が互いに助けたり教えたりすることが日常的に行われています」

◎4つの基本活動を組み込んだ時間割

すべての授業は、学習指導要領に基づいて編成した同校の教育課程を基に、教員が指導計画を立てて「週単位予定表」を作成し、子どもに配布する。

「仕事(学習)」の時間のうち「ブロックアワー」では、子どもが自分で計画を立てて学びを進める時間と、グループで体育や音楽などを行う時間がある。「ワールドオリエンテーション」は「総合的な学習の時間」に相当し、午後に行うことが多い。それらの間に「サークル対話」や「遊び」を行う(図3)。

「時間を機械的に区切らずに、状況に応じて活動の時間を延ばしたり、縮めたりしています。例えば、朝のサークル対話で、子どもが分担して

図3 ある1日の日課表の例

下記の日課表は一例で、ブロックアワーの時間帯などは、毎日異なる。子どもには毎週、週単位の予定表が配布される。

8:20	読書	
8:35	サークル対話	「サークル対話」では、毎朝配布する「小学生新聞」の内容を基に対話をしたり、自主学習ノートを紹介し合ったりと、テーマは様々。朝と帰りの時間に加えて、1日の中で必要に応じて行う。
8:50	ブロックアワー	
9:40	ブロックアワー	午前に行う「ブロックアワー」では、各教科の学習を自分のペースで学んだり、友だちと体験的・対話的に学んだりする(外国語活動・外国語科の授業は、ALTが来校する日に、「ブロックアワー」の時間中、当該学年の子どもを別の教室に集めて行う)。
10:25	休憩	
10:45	ブロックアワー(体育)	
11:30	ブロックアワー(音楽)	体育や音楽などは、一斉授業で行う。
12:20	給食	
12:55	休憩	「遊び(休憩)」では、子どもがやりたいことを自由に選択して遊ぶことができる環境づくりをしている。
13:25	そうじ	
13:45	ワールドオリエンテーション	協働的に学ぶ「ワールドオリエンテーション」では、複数のテーマが同時進行する。
14:30	催しやサークル対話	「催し」では、その週の学びを簡単にまとめて発表したり、学んだことを他のグループや保護者と共有したりする。
15:00	下校	

※常石とともに学園の提供資料を基に編集部で作成。



写真1 廊下には、机として使えるスペースといすが設けられており、ブロックアワーの時間に、ここで学ぶ子どもも多い。教室と廊下の境は大きなガラスで、教室の中からも外からもそれぞれの様子が分かる。

毎日記録している気象情報について話していたら、ある子どもが雨量の測り方に疑問を持ちました。『どうすればいいかな?』と教員が問いかけると、関心のある子どもたちが理科室に移動し、かさ比べる学習に移っていきました。そのように、子ども自身の問いを出発点とした自発的な学習が行われています(甲斐校長)

一人ひとりの「分かった!」を 支援する「ブロックアワー」

ブロックアワーで進める国語・算

数・社会・理科については、教員が週や単元の初めに課題を提示。子どもは、それを基に学習計画を立て、学習のゴールをイメージし、見通しを持った上で、教科書やドリル、端末など、自分に合った方法で学びを進める。どこで学ぶか、誰と学ぶかも自由で、まさに「個別最適な学び」が実践されている(写真1)。坂口憲治教頭は、次のように語る。

「子どもによって、『分かった!』という瞬間は異なります。1人で教科書を読んで分かる子もいれば、友だちとの対話の中で理解できる子もい



写真2 1～3年生の子どもたちが、それぞれ自分の知っていることを出し合い、それをホワイトボードに書きながら、足し算について考えている様子。違う学びをしてきた子ども同士が対話することで、それぞれ違う発見があり、それを出し合うことでさらに学びが広がる。

ます。一人ひとりが自分に合った学び方で学べるようにしています」

ブロックアワーでは、3学年の学びが同じ教室で同時に進む。そのため、6年生が学習する分数の割り算に4年生が興味を持って取り組んだり、6年生が4年生の分数を学び直したり、異学年で分数について教え合ったりと、学年を超えた学びが展開されている(写真2は低学年の様子)。

「先生たちは、学年を超えた学びを俯瞰しながら、つなげることを大切にしています。教室を回って子ども一人ひとりの学びの状況を見取り、個別に支援したり、理解できていない子どもを集めて、つまづきの状況に応じて支援したりすることもあります」(甲斐校長)

宿題も、教員が一方的に期日や学習範囲を示すことはせず、1週間の目安を示し、子どもが自分で計画を立てて取り組む。そして、学期末には、教員が作成した各教科のテストで学習の到達度を把握し、子どもたちは、自分の学びを振り返っている。

子ども自らの気づきを大事にする「ワールドオリエンテーション」

ワールドオリエンテーションは、子どもが身近な題材の中から見つけた問いを、教科の学習と関連づけながら探究する時間だ。高学年は、この2年間、地域住民から借りた土地

で「インスタ映え」するヒマワリの栽培などに取り組んでいる。今年度は、種まきから2週間経っても発芽せず、原因と解決策を子どもたちが話し合った。6年生が理科で学んだ発芽の条件から、水不足が原因ではないかと推測。水やりをしやすいようポットに種をまき、こまめに水を与えたところ無事に発芽。苗を畑に植え替えた。

「ワールドオリエンテーションでは、リフレクション^{*4}を大事にしています。何を学び、それが次の学習や異なる分野の学習にどうつながるかといった視点で、学びを捉えられるようにしています」(坂口教頭)

ブロックアワーでもワールドオリエンテーションでも、大切にしているのは子ども同士の対話だ。

「対話を通じて、各自の学びや経験を互いに共有することで、1人の子どもの学びがほかの子どもの学びにつながっていきます。それを異学年で行えば、『協働的な学び』の効果はさらに広がります」(甲斐校長)

坂口教頭は、教員同士の対話がとても活発だという。

「15時に子どもが下校すると、グループの教員同士はもちろん、低学年と高学年で、学校全体で、子ども一人ひとりの『学び』について、共有したり、議論したりしています。教員もサークル対話によって、よりよい支援をとともに考えています」

ポートフォリオを基に子どもが保護者に成果を報告

◎三者面談で行う学習評価

学期の終わりには、子どもが、単元テストや作文、作品の写真などを綴じたポートフォリオを見せながら、学びの成果と課題を保護者に伝える「三者面談」を行う。1人20分ほどかかるが、子どもの成長を喜ぶ保護者の姿が見られるという。1・2学期は、それが通知表となり、3学期は、教員が子どもに1年間の生活と学習について記述した手紙を渡す。

◎居心地のよい学びの場づくり

校舎は、地元企業の支援も受けながら改装。教室や共有スペースは居心地がよいリビングのようにし、黒板ではなく、可動式のホワイトボードを利用している。教室ごとに異なる色で塗装した壁には、子どもが折り紙を貼ったり、飾りをしたりと、自分たちでよりよい学びの環境をつくっている。

◎保護者・地域等との連携

保護者や地域住民が自由に活用できるオープンスペース「ともにカフェ」では、保護者の有志によって、保護者の対話会などが開かれている。また、ワールドオリエンテーションでは、NPOと連携し、子どもの学びが深まるテーマ設定など、継続的な助言を得ている。

開校1年目で試行錯誤の段階だという甲斐校長は、「子どもは一人ひとり異なり、どの子も同じように学ばわけではないわけではありません。その子にとって最適な支援をするため、子どもとともに学び続けていきます」と語る。福山市は、イエナプラン教育の理念を踏まえた常石ともに学園の実践を市内に広め、「福山100NEN教育」の実現を目指す。

* 4 自分の言動や活動の過程などについて客観的に振り返ること。新しい気づきや思考・行動の変化をもたらすことを意図して行われる。